

日本の「鎖国」を米国から考える

武内 宏樹

洋の東西を問わず、卒業式シーズンは華やかさ
と感傷が同居する。筆者が教鞭を執るサザンメ
ジスト大学(SMU)でも5月14日に卒業式が行
われた。3年ぶりに全学の式典に加えて、学部ご
との式典もあり、2年前に拜命した政治学部の教
務主任として、卒業証書授与の際に各人がカード
に書いてきたメッセージを読み上げるといふ役目
を初めて果たした。感謝と喜びに満ち、希望と不
安が交錯した思いを一人ひとりが語っていた。コ
ロナ禍に翻弄された学生生活であったが、未知へ
の探究心と易きに付かない勇気を持って、グロー
バル化と社会の分断が進む世界を生きていってほ
しいと願う。

SMUでは全米に先駆けて、2020年8月に
学生の8割に对面授業を提供する形式でキャンパ

スでの活動を再開し、2021年8月からは全面
对面授業となった。それゆえ、5月29日付の日本
経済新聞電子版で、「(日本の)大学が2022年
度から対面での活動を拡充している」という報道
を目にしたときは大いに面喰らった。もちろん、
ワクチンが開発されていない段階でキャンパスに
学生を戻すというのはハイリスクの決断であった
が、結果として英断だったと思う。教育の質を確
保するために、コロナ対策、設備や備品などのデ
ジタル化で多大の投資が必要になっただけでなく、
現場の教員の負担も大変なものだった。「1年待
てば状況は変わるだろう」という発想は学生の立
場を全くわかっていない。若い人にとっての1年
は「重い」のである。米国の大学ではいい意味で
の「詰め込み教育」を行うのであるが、それに真

剣に向き合い、語るに足る学びをしている学生た
ちにとつて、人生で最も吸収力が高い4年間に無
駄にできる時間などない。

筆者は毎年SMUのサマープログラムを関西学
院大学で行ってきたが、昨年、一昨年に続いて今
年も中止を余儀なくされてしまった。今年は2年
続けて夏休みを棒に振った大学3年生にとつては
最後の夏になるので、これまでにない数の応募が
あり、厳正な審査によって選ばれた21人の精鋭を
日本に連れていくべく準備万端であった。しかし
ながら、結局準備に必要な時間を考え、3月初旬
に開学での実施を断念、「Japan passing」をして
留学先を英国オックスフォード大学に切り替えた。
米国の大学は、日本への交換留学が一切できない
のに、日本からの留学生は変わらず受け入れてい
ることに強い不公平感を持っている。交換留学生
は所属大学に授業料を払って受け入れ先の大学で
勉強するという仕組みなので、日本に学生を送れ
ず米国側だけが一方的に財政負担をかぶる状態に
不満を募らせているのである。

日本という国は、興味はあるが、どうしても行
きたい「憧れの国」というより、行ってみたらフ
ァンになる国ということに我々は思いを馳せなけ
ればならない。最近になって日本政府は限定的に

外国人留学生を受け入れる方針を示したが、「So
little, too late」である。昨年11月30日から3カ月
にわたって全世界からの外国人の新規入国を停止
する「鎖国」政策を実施した。自国民を守るとい
う趣旨は果たして功を奏したか。否である。内閣
支持率が上がっているという自信から、水際対策
が効果的でないとわかってからも、「世論の支持」
を盾に岸田政権の反応は鈍かった。首相が5月5
日に英国の金融街シティーで実施した講演で、「日
本は今後も世界にオープンだ。ぜひ日本にお越し
ください。最大限の『おもてなし』をする」と訴え
たが、日本政府の度が過ぎる国境閉鎖措置により
これまでの労苦が水泡に帰した者からすれば「よ
く言うよ」という思いである。2年以上外国との
接触を断られた日本国民は、日本で学びたいとい
う留学生の入国を拒否することが海外での日本に
対する評判を落とし、将来にわたって日本の国益
を毀損しているということに気づいているのだろ
うか。人の交流こそ安全保障と経済成長という国
力の礎であることを知ってほしい。コロナ禍の下
でも世界はどんどん前に進んでいる。霧が晴れた
ときの日本の立ち位置は何処に？ 内向きになっ
ている場合ではないのである。

サザンメジスト大学(SMU) 准教授